

アンバラングダを初めて訪れた折、先ず高い椰子の木と小さな街並が私の視界に入った。スリランカの主要産業は農業である。当地の仮面文化は日本の仮面文化は勿論、スリランカ周辺のアジア諸外国のそれとも共通点がみられる。仮面には農業を営む人々の悪魔を鎮める役割があり、病を防ぐお守りでもある。「痛い、痛い、飛んで行け…」の願いが込められているのであろう。今日ではアンバラングダの仮面は工房から飛び出して独り歩きし、スリランカを代表する民芸みやげとして、多くの観光者から重宝されるようになっている。スリランカの仮面はスリランカ国をあげてのセールスポイントであり、アンバラングダは魅力的な観光スポットとして多くの人々が訪れている。その一方、アンバラングダは西南海岸の素朴な漁港としてもいまだに機能し続けている。何処となく心にかかる町ではある。

仮面工房の片隅で

アンバラングダの仮面工房でワークショップに参加し、ショールームを見学した。仮面を制作している工房では地道な職人芸を見ることが出来る。蛇の飾りが付いた羅刹^{らせつ}、王様、王妃、兵士、獅子、熊、鱈など数え上げられない程の仮面の種



仮面博物館の展示品

(写真は「トリップアドバイザー」から)

類があった。見学を始めてしばらくすると「説明は一応終了しましたので、あとはご自由に観覧下さい」とのことであった。集中して説明を聴いていたのでぼーとしていたら、日本語を流暢に話される現地ガイドから声をかけられた。父親がスリランカ人の船員、母親が日本人の混血の男性とのことである。日本語が流暢なのはそのためかしら？

「日本に行った父を母が好きになり結婚してこの国に来ました。しかし、どんなに好きであっても、スリランカは貧しい国なので生活の苦勞は言葉では表せないと母は言っていました。一緒に暮らしている内に男と女の感情から兄妹のよう



アンバラングダの仮面博物館 (写真は「グーグルPanoramio」から)



になっていくのですね。私も二人の後姿をみて育ちました。ガイドになってからは、ツアーの観光客が去った後、ごみ箱に捨てられたシャツやタオル、靴下まで拾って持ち帰りました。捨てた物を拾っても誰も何も云わないと思ったからです」。

彼の話しはアンバランゴダの思い出として、強烈にして鮮明な印象となっている。日本から来た私に伝えたいものがあったのかもしれない。まだ、ご存命であろうか。現在、国際結婚は花ざかりである。考えようでは文化を重ねる暮らしは自分の生き方への挑戦になるであろう。一方人生に厚味を与え豊かなものにしてくれるものだと思う。人種の異なる両親を持つ子供たちは独特の表情をし、またその表情にも魅力がある。私は工房で展示されていた作品以上に彼の印象が強く残った。人々は仮面を被り、苦しみや哀しさ、嘆きを覆い隠してきた。仮面の中で溜息をつき、涙を流してきたのかもしれない。中には、スリランカ解放の思いを托していた人々もいるのであろうか。

『悪魔祓い』への憧れ

タランガッレ・ソーマシリ師が、ゴール、ミリッサ周辺の西南海岸に仮面劇が行われる場所が集中していると教えて下さった。私は太鼓ドラムの音色に

呪術が入っていようが、奇怪な舞踊ダンスであろうが、仮面劇への興味をますます、エスカレートさせていた。

「悪魔祓いの儀礼」の仮面舞踊は大別すると2つに分けられる。祝祭に行われる仮面劇「コラム」と仮面舞踊「トウィル」である。前者は徹夜で行われる華麗な仮面劇であり、社会風刺などもあって世俗的である。シンハラ人の日常を仮面によって表現している。言葉を代えれば人間の欲望を模しているようだ。

後者の仮面舞踊は、仮面を被って病の症状を表す。コレラなどの伝染病、吐気、盲目、蛇などを演じる舞踊はどこことなくピエロの演技に似ている。仮面劇は、かつては豊穰ほうじょうを感謝する宗教色を帯びていたが、もっと遡さかのぼれば、悪魔祓いに始まると考えられている。その由来は長くなるので別の機会に譲るとして、医師から見放された病が何故治療出来るのか。現代のミステリーである。劇の中心は仮面舞踊だが、常に「仏陀」の存在が意識されているように思われた。

■注

羅刹：羅刹とは鬼神の総称。ヒンドゥー教に登場する鬼神ラクシャサが仏教に取り入れられたものである。

(ウィキペディアから抜粋)